薬師寺十字廊の調査
－第519次

1　はじめに

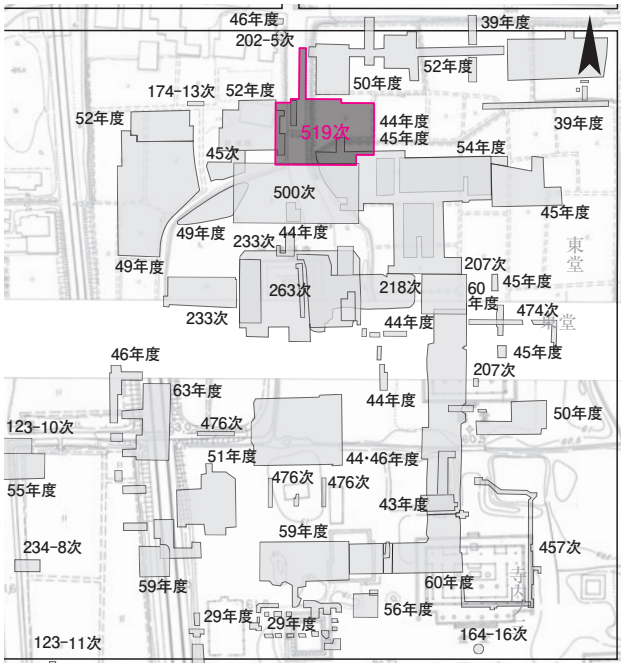
今回の調査は、2011年から始まった薬師寺旧境内保存整備計画の一環としておこなったものである。十字廊の全容を解明すべく、過去に奈良文化財研究所（2000年以前は奈良国立文化財研究所）が発掘調査をおこなった十字廊西部の既調査区に一部重ね、十字廊の中央部以東を主たる発掘調査対象とした。あわせて、十字廊と東小子房の関係を明らかにするため、東西約39m、南北約21mの調査区を設定した（図Ⅲ-73）。さらに、調査の過程で十字廊基壇の北端が設定した調査区よりも北方に想定されたため、これを明らかにする目的で、南北17m、東西３mの細長い調査区を北方に拡張した。調査面積は合計約872㎡で、そのうち新規発掘部分は約768㎡となる。

十字廊は、国内はもとより海外でも同じ名称の施設は見当たらず、その機能は明らかではない。しかし、『薬師寺縁起』によれば食殿とも呼ばれていたことがわかり、この別称からうかがえるように、廊としての機能だけでなく、食堂に付帯する機能をもっていた可能性もある。同書によれば、十字廊の規模は、東西14丈１尺、南北５丈６尺、柱高９尺２寸とされる。

十字廊は、天禄４年（973）に「食殿堂童子宿所」から出火した火災により焼失した[1)]。その後、寛弘２年(1005)に再建されたと記録されているが、それ以後は十字廊に関する文献史料はみられず、いつまで存続したかは不明である。延宝２～４年（1674～76）の作とされる『伽藍寺中并阿弥陀山之図』など江戸時代の絵図には十字廊が描かれていないので、遅くともこの頃までには廃絶していたのであろう。

2　既往の発掘調査

十字廊の西半は、昭和52年度に奈文研によって発掘調査され、十字廊が食堂の背後に存在することが判明した[2)]。この調査では、十字形の平面のうち東西に長い東西廊西半の桁行４間、梁行１間分の礎石据付痕跡と、南北に長い南北廊の西側柱１間分の礎石据付痕跡を検出した。さらに、基壇外装は、凝灰岩製の羽目石を直接地面



図Ⅲ-73　第519次調査区位置図　1：3000

に立て並べる形式であったことも確認した。また、十字廊の基壇西北に掘られた井戸が基壇築成にあたって西側に造り替えられており、その時期が出土遺物から奈良時代中頃と推定されるので、十字廊の建立時期を奈良時代後半頃に求めた。これらの発掘調査成果と『薬師寺縁起』に書かれた規模をもとに、十字廊の建物は、桁行11間・梁行２間の東西棟（東西廊）の中央から、正面（南方）に３間、背面（北方）に１間の張り出し（南北廊）のある十字形平面の建物であると想定された。

一方、薬師寺では大房・付属屋・小子房からなる西僧房が昭和52年度の発掘調査で確認されている。東小子房にはこれまで発掘調査がおよんでいなかったが、昭和44、45年度に発掘調査された東僧房の大房が西僧房の大房と同規模・同形式であるため、東小子房もまた、西小子房と同規模・同形式と想定された。十字廊の北方についても、昭和50年度に発掘調査をおこなっており、奈良時代の掘立柱建物２棟を検出している。２棟とも南北２間、東西４間以上の東西棟建物と考えられ、遺構が重複することから建て替えたものとみている[3)]。

また、今回の調査区に南接する食堂は、発掘調査（平城第500次調査）の結果、基壇規模が東西47.1m（159.1尺）、南北21.6m（73.0尺）、桁行11間・梁行４間の東西棟礎石建物であることが明らかになっている[4)]。

3　基本層序

近現代における土地利用のため、基本層序は調査区の東西で大きく異なる。近現代の耕作により上部を削平された東半部では、近現代の整備盛土（厚さ約60㎝）および耕作土（約30㎝）の直下に、瓦片を多量に含む時期不明の包含層（約20㎝）、その下に遺構検出面である整地土

(約10〜30㎝)が堆積し、地山に至る。西半部の基本層序は、表土（約20㎝)、近現代の整地土（約60㎝)、十字廊の基壇土および整地土(約10〜40㎝、奈良〜平安時代)、地山である。以下では、十字廊に関連する遺構、十字廊と同時期と考えられる遺構、十字廊建立以後の遺構に分けて記述するが、いずれも奈良時代の整地土および地山上で検出された遺構である（図Ⅲ-74)。

4　十字廊の遺構

今回の調査では、十字廊SB3100の中央部から東部にかけての基壇および礎石据付痕跡を検出した。

礎石の据付痕跡　十字廊SB3100の礎石は調査区内には遺存していなかったが、１辺1.1〜1.5ｍの隅丸方形の礎石据付痕跡を21ヵ所（うち４ヵ所は旧調査で確認済み）で確認した。特に調査区西北の入隅部では、礎石据付のために壺地業を施した痕跡を確認した。厚さ10〜20㎝程度の砂質土や粘質土を層状に積む版築をおこなったり、10㎝角程度の瓦片を意図的に敷き詰めたりしている。礎石据付痕跡からは薬師寺の創建軒平瓦（薬師寺201型式、6641G）を含む奈良時代の瓦片が出土したが、平安時代以降のものはみられない。

これらの礎石据付痕跡の配置と過去の成果を総合すると、SB3100は基壇をもつ礎石建物で、東西廊が桁行11間、梁行１間、南北廊が桁行４間以上、梁行１間、その規模は東西41.7ｍ（141尺、『薬師寺報告』の薬師寺造営尺である１尺＝29.6㎝として算出、以下同様)、南北14.5ｍ（49尺）以上であることが明らかになった。これは、前述の『薬師寺縁起』に記された十字廊の規模と近似する。東西廊と南北廊は、東西廊の中心すなわち東西両側から６間目、南北廊の南から３間目で互いに接続する。

『薬師寺報告』では、南北廊は接続部より南側に３間、北側に１間と想定しているが、今回の調査では接続部より南に２間、北に１間を確認した。ただし、南北廊東面・西面の基壇外装や雨落溝はこれより北または南にのびるため、南北廊については南側に２間ないし３間および北側に１間ないし２間と修正される。また、東西廊の梁行は２間と想定されていたが、東妻中央の礎石据付痕跡は確認できなかったため、１間の可能性が大きい。

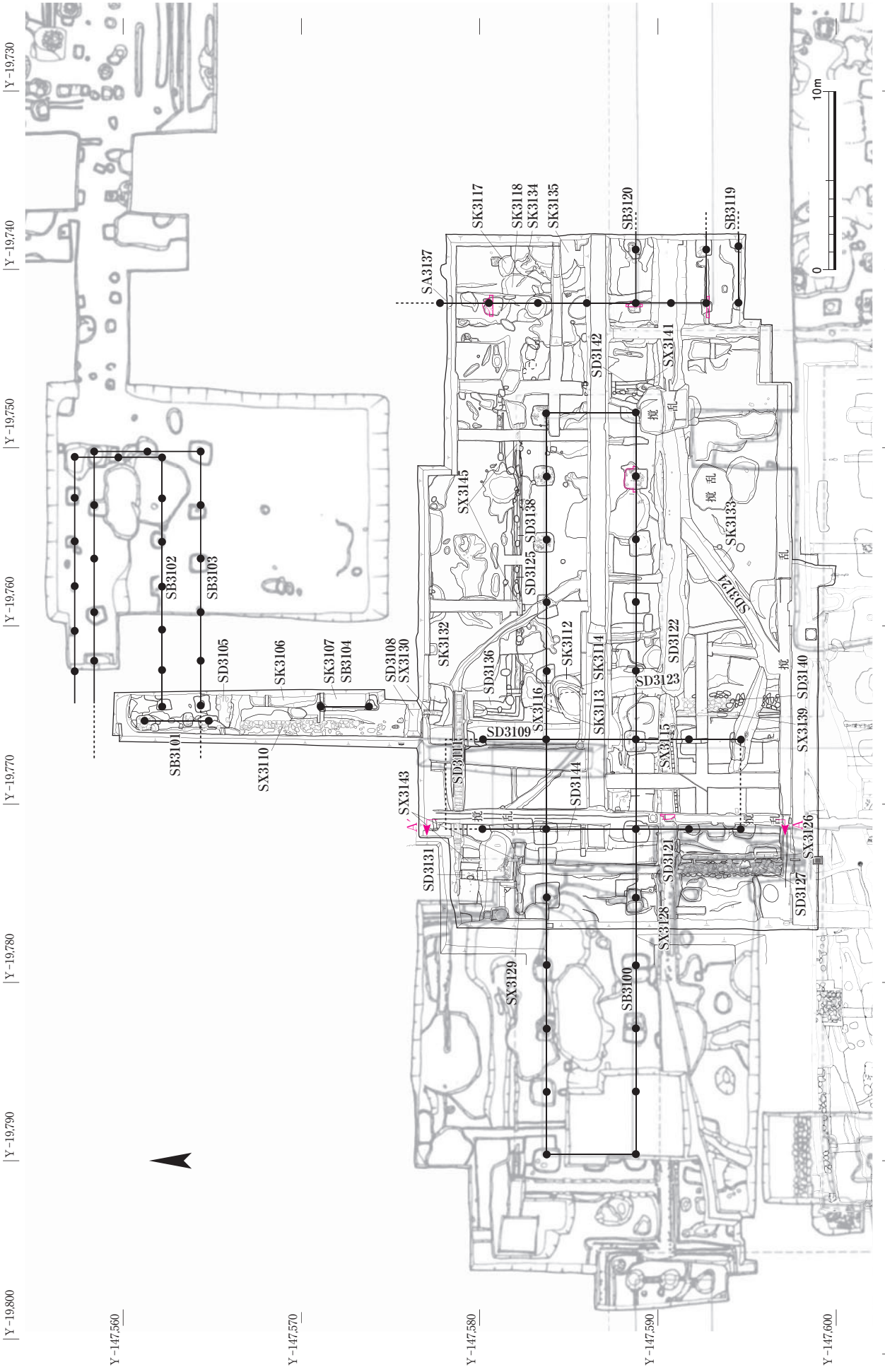
柱間寸法は、壺地業の規模が大きいため柱心の位置を特定しにくいが、東西廊の桁行は中央間が約5.0ｍ(17尺)、その外側各２間が約3.8ｍ(13尺)、両端各３間が約3.5ｍ(12尺)、梁行は約5.0ｍ（17尺）と想定できる。南北廊は、桁行が接続部より北１間で約3.5ｍ（12尺)、接続部が約5.0ｍ(17尺)、接続部より南２間が約3.0ｍ(10尺)、梁行は約5.0ｍ（17尺）である。

基壇および基壇外装　遺構の遺存状況の良い調査区西南部では、現地表面下約30㎝で版築による基壇土を検出した。雨落溝底石上面からの残存高は10㎝未満で、標高は60.08ｍである。東西廊の基壇南辺や、東西廊と南北廊の接続部の大部分は、中近世の水路や導水管等を埋設するための溝SD3109・SD3122・SD3144により破壊されている。

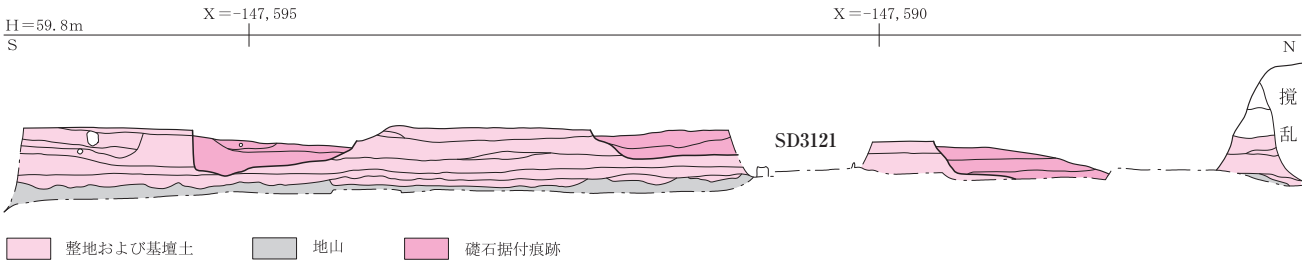
基壇の規模は、東西廊では、昭和52年度の調査で検出した東西廊西面基壇外装の羽目石外側から今回の調査で検出した同東面基壇外装SX3141の羽目石外側までの距離で、東西44.4ｍ（150尺）である。南北は調査区西部で検出した東西廊北面西側の基壇外装SX3129と同南面西側の基壇外装SX3128の羽目石外側間で、8.3ｍ（28尺）である。南北廊では、東西の幅は東面南側の基壇外装SX3139と西面南側の基壇外装SX3126の羽目石外側間の距離で東西8.3ｍ（28尺）である。南北の長さは、南北廊の北端および南端が後世の削平のため明確ではないが、基壇土および基壇外装の残存部分から推定すると、およそ21ｍ（70尺）である。基壇の築成にあたっては、地山上の整地土、あるいは地山を10㎝程度掘り込んで基壇範囲と周辺とを一体的に整地した後、周辺とは異なる基壇土（凝灰岩の細屑を部分的に多量に含む）を版築によって積み、基壇外装を整える。

整地土および基壇土の厚みの単位は10〜15㎝程度である。南北廊基壇南端想定位置で地山を掘り込んだ痕跡を確認したが、この層の境界を平面および断面で東西に追跡したところ、整地範囲は十字廊の平面形に合わせたものではなく、付近一帯に広くおよんでいた。また、基壇土が礎石据付痕跡の掘方の一部を覆い、掘方を確認できない箇所もあるため、礎石の据え付けと基壇の積み上げが一部並行しておこなわれたことがわかる。

基壇外装は、凝灰岩製の羽目石を直接地面に立て並べる形式で、その外側には10㎝程度の間隔をあけて雨落溝が設けられている。羽目石を地面に直接立てる形式の基壇は、薬師寺においては、中門や回廊で用いられ



図Ⅲ-74　第519次調査および周辺の遺構平面図　1：300



図Ⅲ-75　十字廊SB3100基壇南北断面図　1：60　右頁に続く

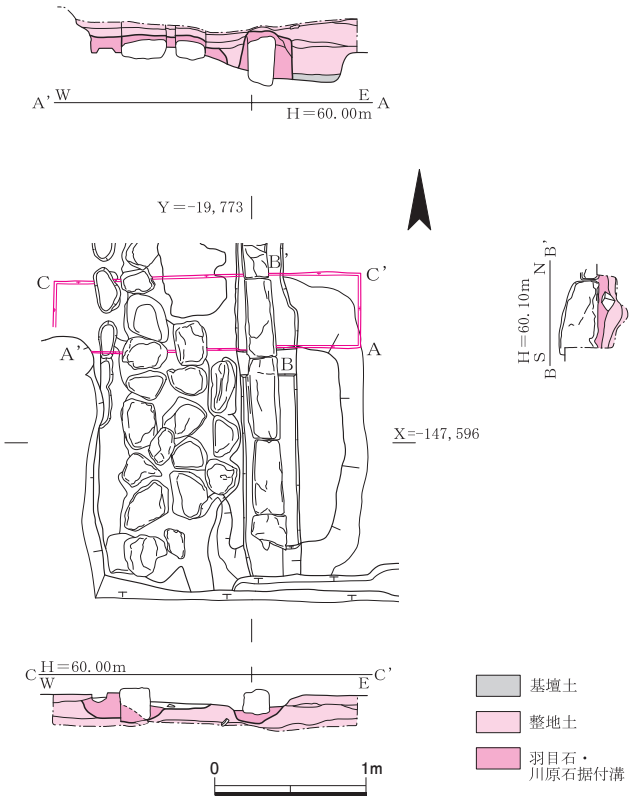
ている。羽目石そのものを検出したのは、南北廊西面南側（SX3126、図Ⅲ-76）、同東面南側（SX3139）、同東面北側（SX3130）、同西面北側（SX3143）、東西廊北面西側（SX3129）、同北面東側（SX3145）、同東面（SX3141）である。羽目石列の外側に、それぞれにともなう雨落溝SD3127（図Ⅲ-76）、SD3140、SD3136、SD3131、SD3142を検出した。また、Ｌ字形に接続するSD3138およびSD3125は東西廊北面東側および南北廊東面北側の基壇外装の据付溝および抜取痕跡で、内部からは細かな凝灰岩片や瓦片が出土した。

羽目石を設置した後、あるいはこれと並行して、雨落溝の据付溝を掘削し、川原石を置く。据付溝の外肩は基壇の外側に施された整地土によって覆われている。なお、一部では瓦片を羽目石の下部に挿入している部分がある（図Ⅲ-78）。これらは、羽目石上端の不陸調整のために意図的になされたものと判断される。

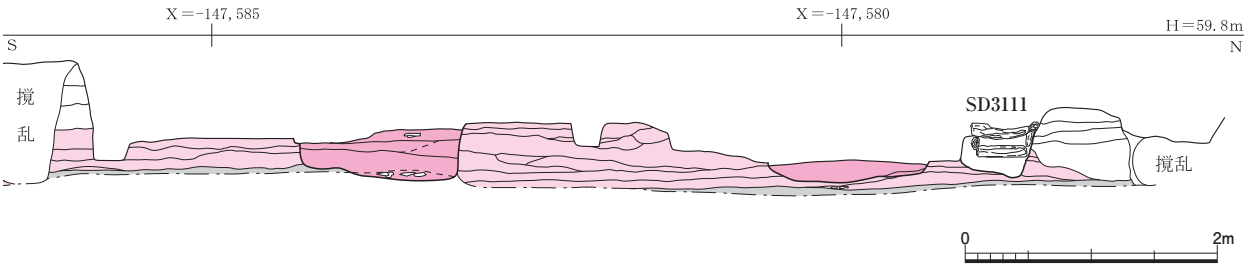
雨落溝は、南北廊東・西面の南側では20～40㎝大の川原石を敷いて造られている。これらを溝の底面に２～３列敷きつめ、両側に側石をおいて、側石上端を底石上面より15㎝程度高くする。南北廊西面北側（SD3131）および東面北側、東西廊北面（SD3136）・東面（SD3142）では石を敷いた痕跡はなく素掘りで、東西廊の北面と南面では雨落溝の仕様が異なる。雨落溝の幅は、東西廊より南側では側石内々で60～70㎝、北側では40～50㎝である。東西廊南面の西側には、板をあてて杭で固定し堰板とした溝SD3121（図Ⅲ-79）を検出したが、これは従来東西廊の雨落溝が存在した場所を踏襲し、後世に改修したものと考えられる。SD3121は南北廊の基壇を横断し東方へと続くが、遺構としては確認できなかったものの、排水の便を考えると、南北廊を分断するこの位置にもともと暗渠があった可能性もある。　**（庄田）**

なお、SD3121の護岸に用いられていた板の樹種同定および年輪年代調査をおこなったところ、樹種はヒノキで、西暦554年以降に伐採されたことを把握した。ただし、辺材が確認されていないことから、この年代はあくまで上限年代を示すものである。　**（星野安治・児島大輔）**

図Ⅲ-76　南北廊西面南側基壇外装（北から）



図Ⅲ-77　南北廊西面南側基壇外装断面図　1：50



薬師寺十字廊の羽目石には、二上山山麓や春日山の地獄谷で産出する凝灰岩が用いられていた。肉眼およびルーペで観察し、高温型石英の有無に基づいて分類して産地推定をおこなった結果、南北廊西面南側のSX3126に地獄谷産の凝灰岩が集中的に用いられているのに対し、その他の大半の箇所では二上山産の凝灰岩が用いられていることを把握した。食堂の調査では地獄谷産の凝灰岩は据え替えとみているが[5)]、今回の調査で検出された羽目石は、据え替えの痕跡がみられないことからすべて当初のものと考えられる。　**（脇谷草一郎・庄田）**

5　十字廊と同時期と考えられる周辺の遺構

東小子房SB3120　西端の桁行１間分、梁行２間分を検出した（図Ⅲ-80）。棟通りの柱想定位置は近世の溝SD3122が深く掘り込んでいるため、遺構が確認できない。柱間寸法は桁行が約3.0m（10尺）、梁行が約2.1m（７尺、検出したのは２間分で約4.2m）であり、昭和52年度に調査された西小子房のそれと同じである。

礎石の据付痕跡は、長辺1.0～1.5m、短辺0.8～1.4mの隅丸方形ないし不整円形で、内部には15～30㎝大の川原石を入れこんでいる。残存深さは、確認した部分で８～24㎝と極めて浅い。SB3120西妻の柱筋は南に並立する東大房の西妻と、北側の柱筋は十字廊の東西廊南側柱筋と、それぞれ同一直線上に並ぶ。十字廊SB3100と東小子房SB3120を含めた東僧房が、統一された設計のもとで建設されたことがうかがえる。なお、東小子房の南側には、２基の柱穴からなるSB3119が検出されている。西僧房の発掘成果を踏まえると、これが大房と小子房の間に建つ付属屋の遺構である可能性もあるが、検出範囲が狭小であり詳細は不明である。

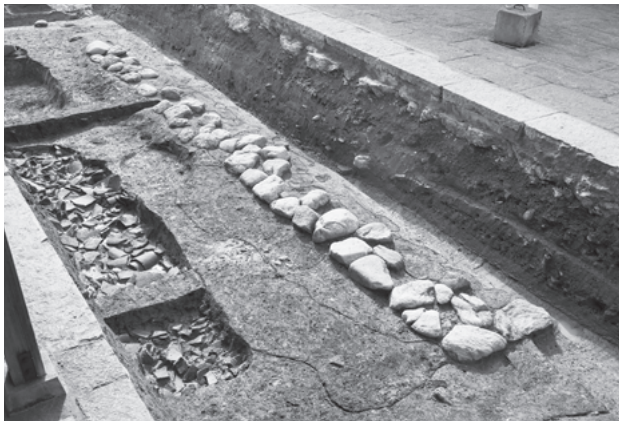
南北塀SA3137　東小子房SB3120の西妻の北方で柱筋を揃える掘立柱塀。直径1.0～1.3mの四つの柱穴が並ぶ遺構で、柱間寸法は約2.7m（９尺）である。東小子房SB3120の西妻と同一直線上に位置するため、これらと同一の設計下で建てられたものであろう。東小子房北方の空間を東西に隔てる塀と考えられる。

石敷SX3110　十字廊の北方で検出した、南北長さ約6.9m、東西残存幅約0.5mの石敷（図Ⅲ-81）。東北端および東辺の残存状況は良好であるが、西側は近世の溝SD3109で破壊されている。石の抜取痕跡を残存部分の西側および南側で検出したことから、石敷はさらに西や南に広がるものとみられる。SX3110と十字廊との間には、後世の溝SD3108が東西を横断するため、両者の直接的な層位のつながりは確認できない。しかし、南北廊東面北側およびその外側と共通する整地土上にSX3110が据え付けられていることから、十字廊と同時期に存在したものと判断した。遺構の検出範囲が狭いため性格は

図Ⅲ-78　基壇外装SX3128下部の瓦片の挿入（南西から）

図Ⅲ-79　基壇外装SX3128と東西溝SD3121（西から）

図Ⅲ-80　東小子坊SB3120遺構検出状況（北西から）



図Ⅲ-81　石敷SX3110

明らかでないが、南北を結ぶ石敷通路と考えておく。薬師寺伽藍中心部において発掘された石敷の通路としては、講堂から食堂に向かう３列の石敷があり、「講堂・食堂間参道」と呼称されている[6]。

礎石建物SB3101　石敷SX3110の北方で南北１間分を検出した礎石建物。柱間寸法は約3.6m（12尺）。礎石の据付痕跡はいずれも隅丸方形で、ともに南北1.1m、東西0.8m以上。この柱筋は、石敷SX3110の東辺と礎石据付痕跡の心をほぼ揃えている。北方の礎石据付痕跡には長さ26㎝、幅22㎝の礎石を残す。これらの礎石据付痕跡には15～35㎝の根石が各５～10石据えられている。また、南方の礎石据付痕跡は、この上から掘りこまれる礎石抜取穴によって一部破壊されている。

礎石据付痕跡の検出面は石敷SX3110の北端に接する厚さ約10㎝の整地土上であることから、厳密にはSB3101はSX3110よりも一段階後行することになるが、両者の配置を考慮に入れるならば、一連の計画下で造られた可能性も十分に考えられる。SB3101の礎石上面の標高は59.48mであり、これは石敷SX3110の上面の標高である59.17～ .24mよりも30㎝前後高い。なお、基壇外装に相当する遺構は検出できなかった。

この２つの礎石据付痕跡の伽藍中軸線[7]からの距離は、約3.6m（12尺）である。また、東方の既調査区（昭和50年度）では、これと連続する遺構は検出していない。したがって、中軸線から東西２間ずつ、合計４間程度の建物の可能性が考えられる。十字廊SB3100と石敷SX3110でつながれた、何らかの施設と考える。

掘立柱建物SB3102・SB3103　石敷SX3110の北方で検出した東西棟掘立柱建物。検出したのは２基の柱穴で、北方の柱穴が南北0.8m、東西0.6m、南方の柱穴が南北0.8m、東西0.9m。今回の調査区の東方でおこなった昭和50年度の発掘調査で検出した２棟の奈良時代の掘立柱建物と柱列をそれぞれ揃えることから、これらと同一の建物の柱穴と考えられる。北方の建物がSB3102、南方がSB3103で、既往の調査によりSB3102が古いことが判明している[8]。同報告においてSB3102は桁行４間以上、梁行２間、柱間寸法がいずれも8.5尺の建物とされていたが、今回検出した遺構により、桁行６間以上、梁行２間、桁行柱間が約８尺の建物と考えられる。また、SB3103は『薬師寺報告』で桁行４間、梁行２間、柱間寸法はすべて10尺の建物とされていたが、今回の検出により桁行５間以上、梁行２間、桁行柱間が約9.0～9.5尺の建物と考えられる。

SB3103は今回の調査区内で西妻の柱を検出しなかったため、西方へと続く可能性が高く、礎石建物SB3101とは同時併存しない。SB3102・3103は奈良時代の建物であるが、礎石建物SB3101を十字廊と同時期と見なすのであれば、これらの掘立柱建物が十字廊の建立された奈良時代後半以前に遡る可能性も考えられる。

掘立柱建物SB3104　石敷SX3110の南部東方において、これと同一面で検出した南北に並ぶ２基の掘立柱穴で、柱間寸法は2.9m（約10尺）である。柱穴の規模は南北0.4m以上、東西0.4m、残存深さ９㎝（北）、南北0.7m以上、東西0.8m、残存深さ29㎝（南）。北方ではこれらに組み合う柱穴が検出できなかったため、南方にもう１基柱穴が存在した可能性があるが、想定位置は東西溝SD3108が深く掘りこんでおり、遺構が検出できなかった。東方は既往の調査区を含め建物跡が未検出である。規模・性格は不明であるが、ここでは南北の柱筋を揃えるため、同一の掘立柱建物の柱穴としておく。10世紀後半の土器が出土した土坑SK3107によって破壊されるため、それ以前の遺構と考えられる。

６　十字廊建立以後の遺構

土坑SK3132　十字廊の東北入隅部の外側で検出した。雨落溝SD3136から40～80㎝の距離を置いて掘り込まれる。東西5.3m、南北3.9m以上の隅丸方形で、検出面からの深さは約30㎝である。薬師寺創建瓦を含む多量の瓦が、須恵器円面硯や土師器皿など少量の土器とともに高密度で廃棄されていた。

土坑SK3106　北側の拡張区中央部で検出した南北3.8m、東西0.7m以上、検出面からの深さ44cmの土坑。創建瓦を含む多量の瓦が高密度で廃棄されていた。厚さ10～18cmの粉炭層が最下部に堆積する。

土坑SK3107　北側の拡張区で検出した東西0.9m以上、南北3.1m以上の隅丸方形の土坑で、残存深さ44cm。黒色土器椀や土師器羽釜など10世紀後半から末頃の土器が出土した。

土坑SK3117　十字廊の北東、東小子房の北方に位置する、東西1.2m、南北0.9m、残存深さ36cmのすり鉢状の土坑。土師器皿など10世紀末頃の土器が重ねられた状態で多量に廃棄されていた（図Ⅲ-82）。出土状況から、複数の廃棄単位が復元できる。

土坑SK3118　SK3117の西に接する、東西1.2m、南北0.9m、残存深さ22cmのすり鉢状の土坑。土師器皿など10世紀末頃の土器が多量に廃棄されていた。出土状況から複数の廃棄単位が復元できるが、特にうち１つは、ほぼ同形同大の土師器皿を24枚重ねて廃棄していた（図Ⅲ-82）。

土坑SK3112　十字廊SB3100基壇内の東北入隅部付近で検出した。十字廊の基壇および礎石据付掘方、土坑SK3114を破壊し、土坑SK3113によって壊されている。東西1.1m、南北2.0m以上の楕円形で、残存深さ21cm。土器細片、瓦片および多量の炭が出土した。

土坑SK3113　土坑SK3112および後述するSK3114を掘り込む土坑。東西1.6m、南北1.9m以上の楕円形で、残存深さ36cm。瓦器碗など11世紀の土器が、多量の炭や瓦とともに出土した。

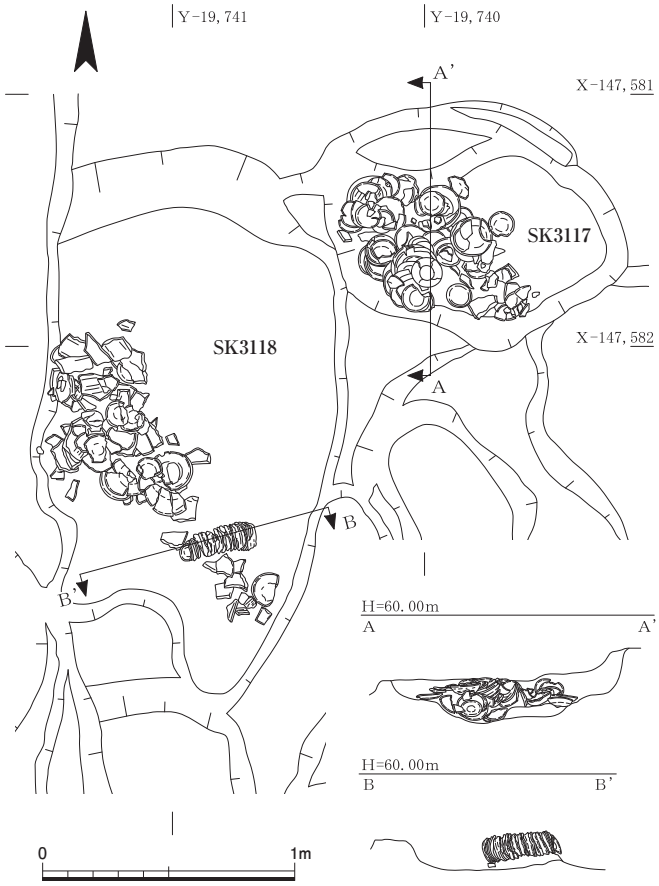
土坑SK3114　前述したSK3112・SK3113の下層にある、東西2.2m、南北1.2m以上、SK3113底面からの深さ35cmの土坑。土坑SK3112およびSK3113に壊されている。螺髪と考えられる銅製品および土師器甕・杯など10世紀後半の土器が、瓦片や多量の炭とともに出土した。

（庄田）

7　出土遺物

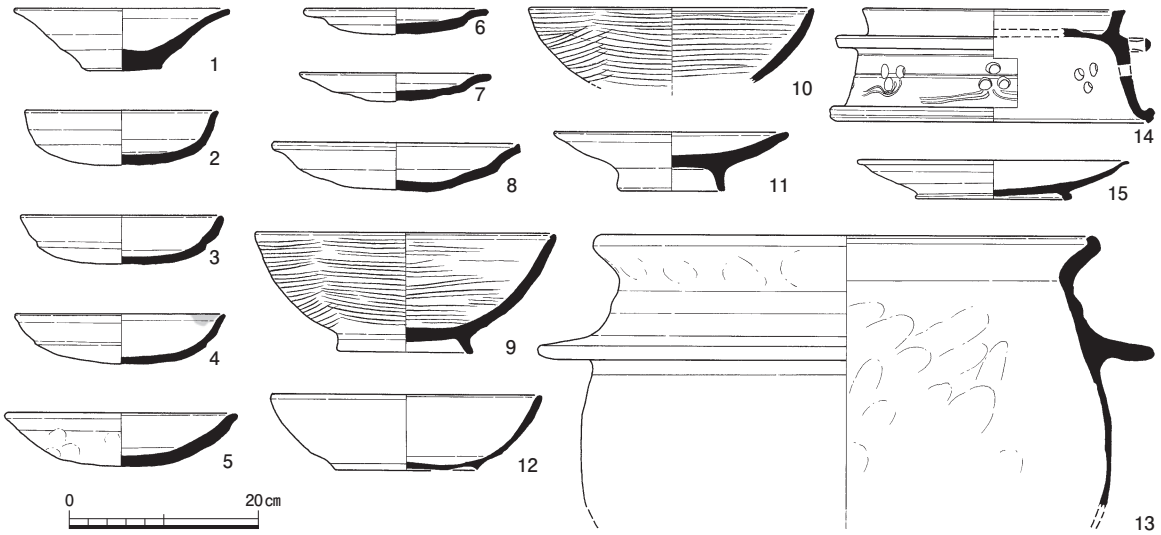
土器・土製品

整理用コンテナ22箱分の土器・土製品が出土した。奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・黒色土器、中近世の土師器皿、瓦器椀、瓦質土器などがあるが、奈良時代のものは少量であり、土坑SK3117・SK3118をはじめとする10世紀後半から11世紀代の土器が中心である。以下、十字廊の廃絶および周辺の空間利用の実態を考える上で重要な資料を中心に述べる。



図Ⅲ-82　土坑SK3117およびSK3118　1：30

土坑SK3118出土土器　SK3118出土土器は土師器杯・皿類を積み重ねて廃棄した状況が復元できる一括資料である。これらは複数の廃棄単位を復元でき、土坑に廃棄する際に、口径の近いもの、同形態の器種ごとに積み重ねて廃棄したとみられる。また、椀・杯・皿の供膳形態に限られる点、灯火器として使用されたものが多い点が特徴である。これらの様相は隣接する土坑SK3117出土土器と同様である。SK3118の代表的な土器を図Ⅲ-83に示した。２～４は杯。口径は10～12cm前後にまとまる。丸底の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がるもの（２）と、口縁部と底部の境に段を持つもの（３・４）がある。４は口縁部にススが付着しており、灯火器として使用されたことがわかる。５～８は皿。口径９～10cm前後と12～14cm前後の大・小の法量分化が認められる。８は口縁端部に強いナデ調整を施し、端部は内側に小さく折り曲げる。これらの杯・皿はすべて口縁端部以下をヨコナデで調整するｅ手法である。１は鉢。平底の底部から口縁部が大きく外反しながら開く。内外面にヨコナデ調整を施す。９は黒色土器Ｂ類椀。半球形を呈し、口縁端部に沈線状の段をなす。内外面に横方向の密なヘラミガキを施す。やや外方へ開く高い高台を貼り付ける。



図Ⅲ-83　第519次調査出土土器　１：４

これらの土器は、皿に器壁の厚いものが目立つ点や杯・皿の口径が矮小化し、杯の法量分化が不明瞭になる点から、西僧房床面出土土器群よりもわずかに新しい様相をもち、10世紀後半から末頃に位置づけられる。

土坑SK3113出土土器　土師器杯・皿とともに瓦器椀が出土した。10は瓦器椀で、内外面に横方向の密なヘラミガキを施す。川越編年[9]の第Ⅰ段階にあたり、11世紀代のものである。11は高台付皿。口縁部が外方に開き、高い高台を貼り付ける。

土坑SK3107出土土器　12は黒色土器Ａ類椀。器壁が薄く、底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。断面三角形のごく小さな高台を貼り付ける。13は土師器羽釜。胴部が張る形態で、口縁部がくの字状に屈曲し、端部を内側に丸く折り返す。幅広の鍔を貼り付ける。鍔下部および胴部にはススが厚く付着し、内面にも喫水線とみられる水平方向の変色範囲がある。10世紀後半から末頃に位置づけられる。

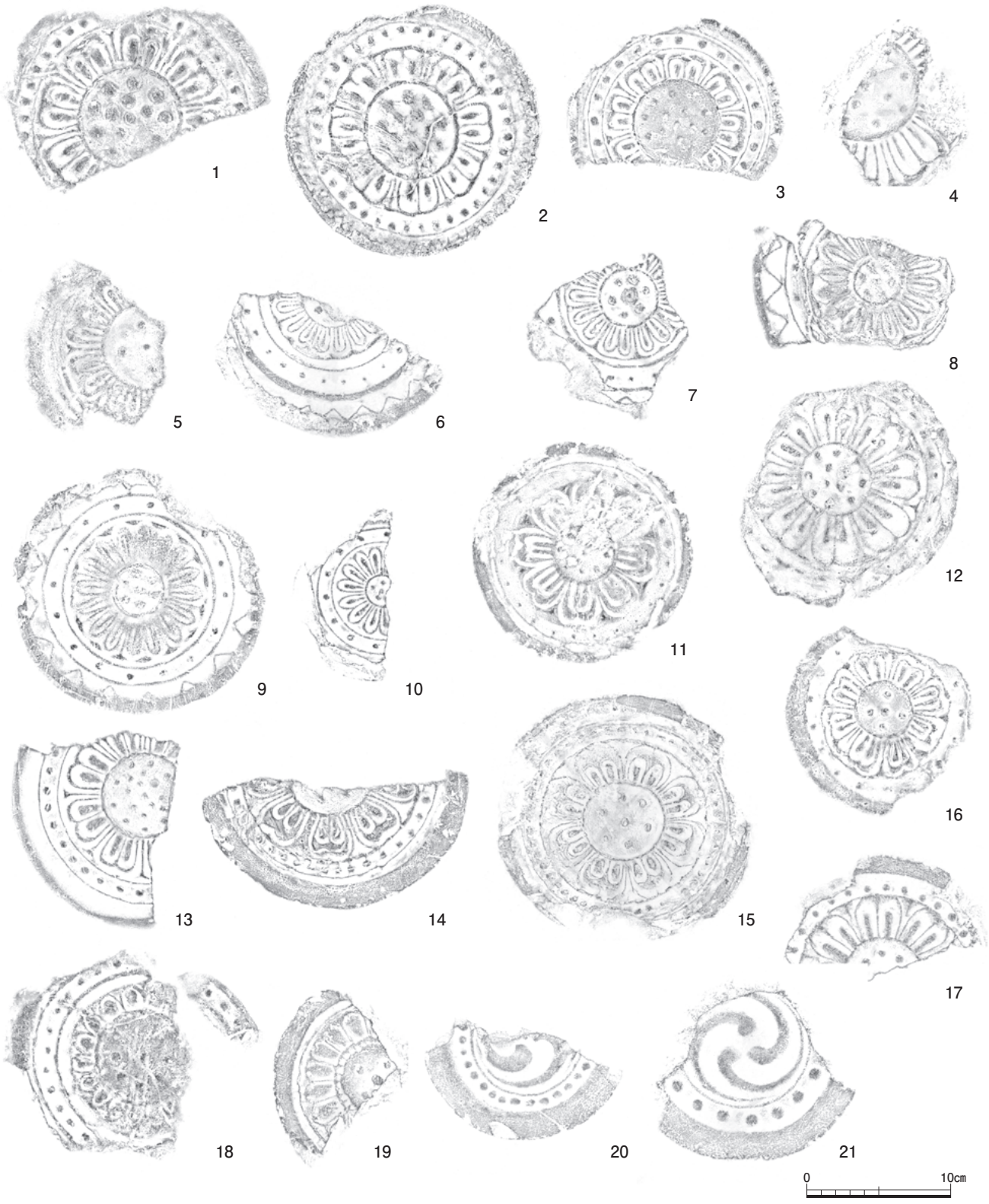
土坑SK3132出土土器･土製品　14は圏足円面硯。堤部径14.0㎝、器高6.0㎝である。硯面が薄く、海部が浅い溝状を呈する。外面に突帯を巡らせ、脚端部は折り返し丸くおさめる。脚部外面に穿孔とヘラ描きを組み合わせて装飾を施す。穿孔は径６～７㎜の円孔を穿ち、３点を山形に配して三つ星とする。これを上向きと下向きに交互に配する。また、円孔の下端付近から２条の波状のヘラ描き沈線を施す。これらの装飾は雲文を表現したものであろう。また、突帯には径約１㎝の円孔を穿っており、筆立てとしている。外面の降灰状況から正位で焼成したことがわかる。15は灰釉陶器皿。体部が直線的に開き、口縁端部をわずかに外反させる。外面は底部から口縁部下位までロクロ削りを施し、断面が四角でわずかに外に開く高台を貼り付けている。内面全体に灰釉を施釉する。猿投窯編年の黒笹14号窯式に位置づけられる。なおSK3132からは、高台の断面形状が三日月形を呈する黒笹90号窯式に位置づけられる皿も出土しており、複数型式の灰釉陶器が混在して廃棄されていることがわかる。

（小田裕樹）

瓦 塼 類

コンテナ約2100箱もの膨大な量が出土した。これらは現在も整理作業中であり、ここでは主要な軒瓦および鬼瓦、隅木蓋瓦について報告する。

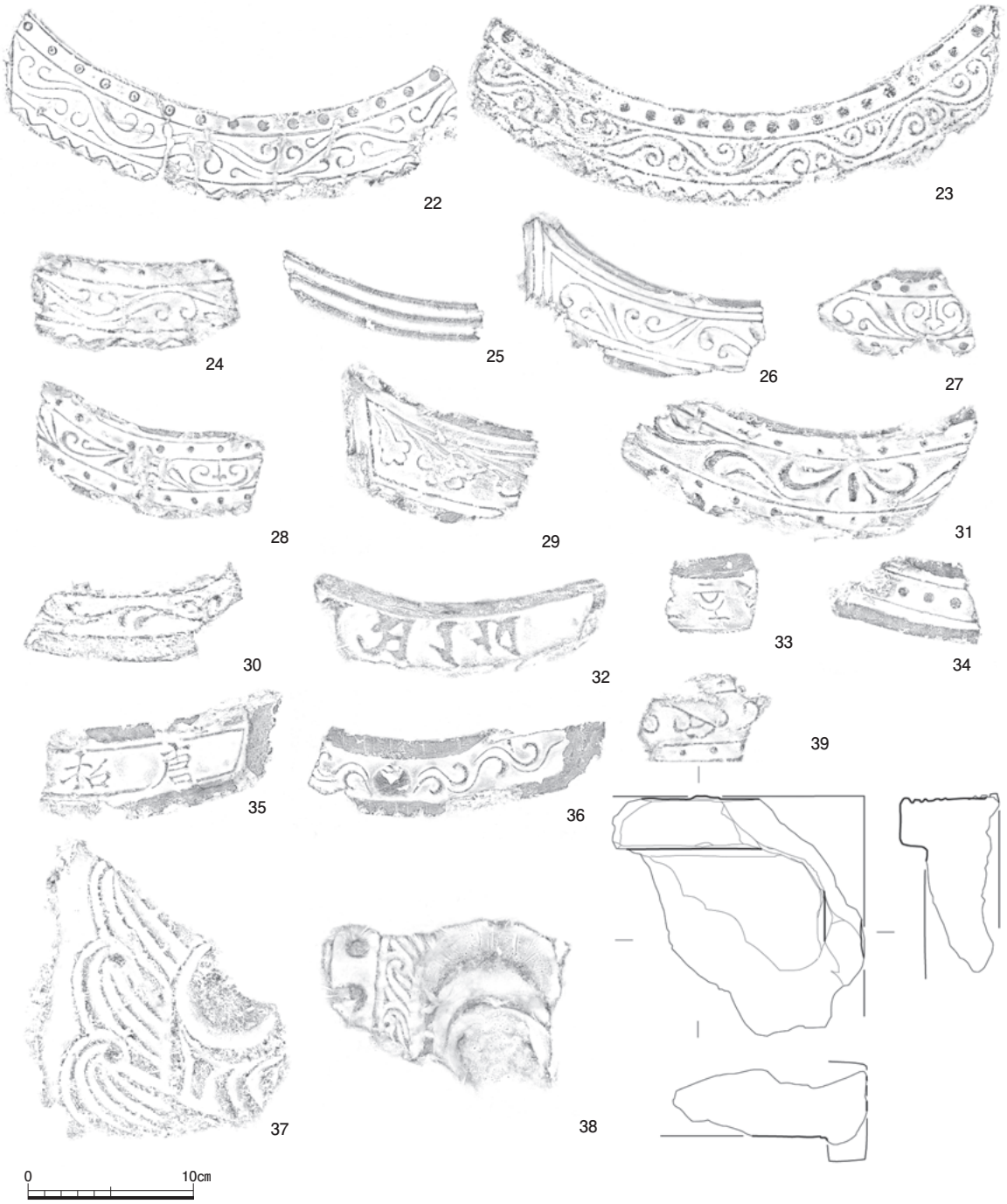
軒丸瓦　図Ⅲ-84、１～12は奈良時代の複弁蓮華文軒丸瓦。１～３は本薬師寺および薬師寺の創建瓦。１は薬師寺２ａ（6276Aa）型式。土坑SK3132出土。２は薬師寺２ａ型式の笵を彫り直した薬師寺２ｂ（6276Ab）型式。最も多く31点出土した。３は薬師寺３（6276Ｅ）型式。小型で裳階用の軒丸瓦。溝SD3111出土。４は外縁が素文になる薬師寺６型式。５は薬師寺９(6225Ｅ)型式。外縁と外区の境に２重の界線をめぐらす。土坑SK3133出土。６は薬師寺13（6282Ha）型式。７は6284Eb型式。土坑SK3118出土。6284Ｅ型式は薬師寺では出土例がなかったが、本調査で３点出土した。８は薬師寺18ａ(6304Ea）型式。溝SD3122出土。９は薬師寺18ａ型式の笵を彫り直した薬師寺18ｂ（6304Eb）型式。本調査では薬師寺２ｂ型式に次いで26点出土した。10は薬師寺19(6307Ｃ）型式。小型の軒丸瓦。11は薬師寺33型式。12は薬師寺35型式。13～19は平安時代の蓮華文軒丸瓦。13は薬師寺37型式で中房の蓮子を不規則に配する。土坑SK3132出土。14は薬師寺38型式。15は薬師寺39型式。土坑SK3107出土。寛弘２年（1005）に再建された食堂の所用瓦である[10]。本調査では４点出土した。16は薬師寺44型式。17は薬師寺61型式。18は薬師寺68型式。19は食堂の調査（第500次）で初めて出土した新型式[11]。ただし興福寺で同笵瓦がある。溝SD3123出土。20・21は室町時代の巴文軒丸瓦。20は三巴右巻文の薬師寺128型式。



図Ⅲ-84　第519次調査出土軒丸瓦　1：4

中央に珠点が痕跡程度残る。21は三巴左巻文の薬師寺170型式。

軒平瓦　図Ⅲ-85、22～29は奈良時代。22～25は本薬師寺および薬師寺創建瓦。22は薬師寺201（6641G）型式。22は土坑SK3134出土だが、薬師寺201型式は十字廊の壺地業掘方や羽目石据付溝SX3126からも出土している。また、平瓦部凸面に朱線のあるものがある。本調査の中では最も多く90点出土した。23は薬師寺202（6641H）型式。土坑SK3106出土。薬師寺201型式と同様凸面に朱線のあるものがある。薬師寺201型式に次いで数が多く、36点出土した。24は薬師寺203（6641I）型式。やや小型で裳階用と考えられる。25は薬師寺209型式。型挽きの三重弧文軒平瓦である。土坑SK3118出土。26は薬師寺214（6663H）型式。上下外区脇区と内区の境に二重の界線をもつ。SK3118出土。27は薬師寺218（6664O）型式。6点出土。28は薬師寺224（6685F）型式。29は6801A型



図Ⅲ-85　第519次調査出土軒平瓦・鬼瓦・隅木蓋瓦　１：４

式。修理司製作の瓦であり、薬師寺では初の出土である。ほかにも修理司関連の瓦として、丸瓦に刻印された「理」ｃが出土した[12]。30・31は平安時代。30は薬師寺252型式。31は薬師寺255型式。溝SD3122出土。32は平安時代末から鎌倉時代の薬師寺285型式。瓦当面に左から梵字で風・水・地・火・空を意味する「カ・バ・ア・ラ・キャ」を配する。土坑SK3135出土。33～35は鎌倉時代。33は薬師寺307型式。東院堂の瓦で瓦当面にある「薬師寺東院弘安辛巳」の銘から、弘安４年（1281）のものである。34は薬師寺314型式。瓦当面に珠文をもつ。35は瓦当面に「唐招提寺」の銘をもつ軒平瓦。薬師寺に出土例はないが、唐招提寺79型式と同笵[13]。36は室町時代の瓦で薬師寺359型式。中心飾りに宝珠文をもつ。

鬼瓦・隅木蓋瓦　37・38は奈良時代の鬼瓦。37は鬼身文鬼瓦１。体部の巻き毛と右足部分の破片。溝SD3124出土。他にも同一箇所の破片が１点出土した。38は鬼面文鬼瓦Ａ。右頬から口、巻き毛の顎髭および外縁の珠文が一部残存する。西大寺に同笵品があり[14]、創建年代から奈良時代後半とわかる。溝SD3122出土。鬼瓦は他にも中近世の小片が出土している。39は奈良時代前半の隅木蓋瓦。前面に花雲文をもつ。側面にも粘土を貼り付け顎部状に作り出す。同笵で形状の異なるものが平城宮第一次大極殿院西楼の調査で出土している[15]。

今回の調査では、奈良時代から近代までの瓦が出土したが、なかでも奈良時代の量の多さが際立つ。十字廊の壺地業や基壇外装SX3126など造営期の遺構からは薬師

表Ⅲ-7　第519次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式・種	点数	型式・種	点数	種類	点数
薬２ａ（6276Ａａ）	7	薬201（6641Ｇ）	90	近世菊丸	1
薬２ｂ（6276Ａｂ）	31	薬202（6641Ｈ）	36	丸瓦（刻印）	5
薬３（6276Ｅ）	5	薬203（6641Ｉ）	3	丸瓦（ヘラ書）	4
薬９（6225Ｅ）	2	薬214（6641Ｈ）	2	平瓦（刻印）	6
薬13（6282Ｈａ）	1	6663	2	隅切平瓦	27
6284Ｅｂ	3	薬218（6664Ｏ）	6	鬼身文鬼瓦１	2
薬18ａ（6304Ｅａ）	7	薬224（6685Ｆ）	3	鬼面文鬼瓦Ａ	1
薬18ｂ（6304Ｅｂ）	26	薬229（6702Ｇ）	1	鬼瓦（中近世）	1
薬18(6304Ｅb)	4	6801Ａ	1	鬼瓦（近世）	3
薬19（6307Ｃ）	1	薬209	3	鬼瓦	3
6309	2	薬236?	1	面戸瓦	3
薬006	1	薬239	1	平面戸瓦?	1
薬033	2	薬243	1	熨斗瓦	3
薬034	1	薬245	1	隅木蓋	1
薬035	1	薬252	3		
薬037	4	薬255	3		
薬038	2	薬264	1		
薬039	4	薬285	1		
薬043	1	薬297	2		
薬044	1	薬298	1		
薬052	1	薬307	1		
薬068	1	薬314	1		
薬128	1	薬359	1		
薬149	1	古代	19		
薬167	1	平安	3		
薬170	2	中世	5		
薬192	2	近世	14		
巴（中世）	17	近代	3		
巴（近世）	12	時代不明	1		
巴（近代）	2				
古代	33				
平安	8				
中世	2				
軒丸瓦計	189	軒平瓦計	210		

寺201型式をはじめとする奈良時代の瓦以外出土しておらず、十字廊の造営が奈良時代であることを示している。

軒瓦に関しては、軒丸瓦は薬師寺２ｂ・18ｂ型式、軒平瓦は薬師寺201・202型式が多い。十字廊の所用瓦としてまずこれらが候補になる。しかし、これらの瓦笵の製作年代はいずれも奈良時代前半までであり、奈良時代後半とする十字廊の造営年代とは一見齟齬がある。ただし、特に薬師寺２ｂ、18ｂ型式は改笵されたうえ、全体的に笵の痛みが激しい。これは長期間に渡る瓦笵の使用を物語る。したがって、薬師寺２ｂ・18ｂ型式と薬師寺201・202型式が十字廊造営まで製作された可能性は十分ある。現時点ではこれらの軒瓦の組合せを十字廊所用瓦として想定しておきたい。　**（石田由紀子）**

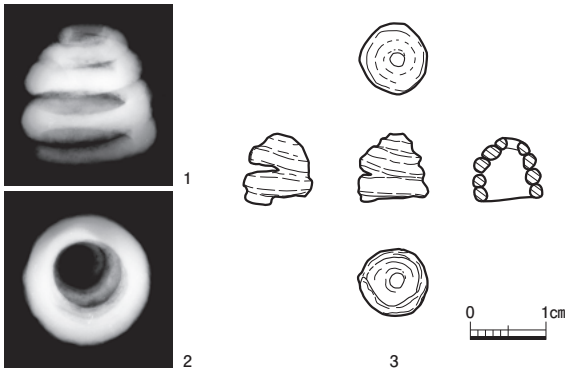
そ の 他

銅製品　螺髪と考えられる銅製品１点が土坑SK3114から出土した（図Ⅲ-86）。高さ7.8㎜、幅8.6㎜、重さ1.2ｇ。表面に明るい赤銅色の金属光沢をとどめる。先端部には孔があく。径２㎜弱の棒状の銅を巻いて成形する。蛍光Ｘ線分析を実施した結果、材質は不純物の少ない銅製と判断された。　**（田村朋美・庄田）**

鉄製品　鉄釘や鉄鏃が合計16点出土したが、十字廊と関連するのは土坑SK3132出土の鉄釘１点のみである。

木製品　近世以降の漆器椀や下駄、竹製の導水管や木製継手が溝SD3122からそれぞれ数点出土したが、十字廊と直接関連するものは出土していない。

石製品　石鍋片、碁石が各１点あるが、いずれも表土ないし耕作土出土である。



図Ⅲ-86　銅製品のＸ線透過写真（１・２）および実測図（３）

銭　貨　寛永通宝が１点、近世の溝SD3144から出土した。古寛永（1636-1659年）に分類される。

植物遺体　自然木のほか樹皮や草茎、種実などが出土した。種実遺体では、土坑SK3114からヤマモモ炭化核とカヤ種子が各１点、溝SD3122からモモ核とウメ核、コナラ属果実が各１点、遺物包含層からマツ属球果が６点出土した。　**（庄田）**

８　おわりに

今回の発掘調査により、薬師寺十字廊の建物と基壇の規模がほぼ確定した。また、十字廊周辺の北方や東方の空間利用についても、新たな知見を得た。最後に、十字廊の上部構造および造営・廃絶の時期についてまとめるとともに、他の寺院との比較を通して十字廊の特徴について述べる。

十字廊の上部構造　柱配置からは切妻造の屋根と考えられ、南北廊と東西廊の梁行規模が同じであることから、両者の棟高や軒高は同じとみられる。南北廊南側における柱位置と雨落溝の関係から、軒の出は1.8～2.5ｍ（6.0～8.5尺）であり、少なくとも手先の出ない組物を備えた建物と考えられる。なお、前述のように建物南北端の柱位置が不明のため、現状では南北廊基壇の南辺および北辺の柱位置からの出は過大となっている。また、出土瓦の種類と量からみて、本瓦葺であることは疑いない。

十字廊の造営年代　十字廊の遺構は一時期分しか検出しておらず、これが建立当初のものとみられる。前述のように『薬師寺縁起』には再建の記述があるが、昭和52年度の発掘調査同様、今回も明確な建て替えの痕跡は確認されなかった。ただし、後述するように、十字廊基壇を壊す土坑SK3114からは多量の炭とともに10世紀後半の土器が出土しており、973年にあったとされる火災後の片づけとの関連性を検討課題として残す。

『薬師寺報告』において、十字廊の造営年代は奈良時代後半頃とされていたが、今回の調査結果もこれと整合的である。建立当初の基壇外装の羽目石の一部が地獄谷産であることは、平城宮内において、奈良時代前半には二上山産を用い、同後半に多く春日山（地獄谷）産を用いるという傾向[16]とも付合する。

十字廊の廃絶年代　十字廊の基壇を壊す土坑群から炭とともに出土した土器の年代は、十字廊の廃絶や再建年代を考える手がかりとなる。土坑SK3114は十字廊SB3100基壇内に位置し、10世紀後半の土師器が出土している。ただし、同遺構は土坑SK3112・SK3113、溝SD3109によって上部を掘りこまれているため、SK3114の掘削後、十字廊SB3100が再建されたかどうかは検証できない。

また、SK3114の上層に位置し、十字廊基壇を破壊するSK3113からは、SK3114よりやや時代の下る11世紀代の瓦器が出土しており、十字廊の存続時期の下限を考える参考になる。ただし、本稿で扱った出土遺物はごく一部に過ぎない。これらの土坑群の性格や時期的な位置づけについては、遺構・遺物に対する十分な検討をへておこないたい。

十字廊の周辺　今回の調査により、十字廊の東方には、想定通り東小子房SB3120が存在し、この北側柱列が十字廊東西廊の南側柱列の延長線上に位置することが判明した。これは西僧房の様相と酷似しており、一部の発掘にとどまるが、対称性が高いとみてよいだろう。

十字廊の北東では、東小子房の西妻から北に延びる南北塀SA3137を検出した。西大寺において、宝亀11年(780)成立の『西大寺資財流記帳』にある「殿」に比定できる礎石建物の東方で、食堂院を南北に仕切る掘立柱塀が検出されているが[17]、SA3137がこれと類似した機能を持っていた可能性もある。

十字廊の北方では参道と推定される石敷SX3110と、さらにその北方に位置する礎石建物SB3101を検出した。また、これらの東方では掘立柱建物SB3102、SB3103、SB3104を合わせて検出した。いずれの遺構も検出範囲が狭小であるため、性格を議論するには十分でない。ただし、規則的な配置関係を示す石敷SX3110と礎石建物SB3101が、十字廊と無関係とは考えがたい。十字廊を含む食堂と関連する建物群が、さらに北に広がって展開していたと想定できる。

他の寺院との比較　古代寺院において、食堂背後の空間が明らかになっている事例は少ない。資財帳の内容とあわせ発掘調査によって「食堂院」の様相が具体的に判明した西大寺の例では、南から食堂・殿・大炊殿が中軸を揃えて並び、食堂と殿は３本、殿と大炊殿は１本の軒廊によって結ばれる[18]。食堂院には東西の檜皮厨や甲双倉などの他の建物も存在していた。

このほか資財帳から食堂背後の様相を知ることができる興福寺・元興寺・大安寺・東大寺などの事例[19]も参考にすると、古代寺院においては、食堂がその機能を果たすためのさまざまな施設が群をなして食堂背後に存在し、中でも「殿」や「食殿」、「廊」といった建物が食堂に付属していたことがわかる。「食殿」とも呼ばれた薬師寺十字廊もこうした建物の一つと考えられるが、これが梁行の大きな東西棟建物ではなく、東西方向の建物と同規模の南北廊が接続して十字形を呈している点が、特徴的といえるであろう。　**（箱崎和久・庄田）**

註

1）『薬師寺縁起』、『扶桑略記』。
2）奈文研『薬師寺報告』1987。
3）『昭和50年度平城概報』1976。
4）薬師寺『薬師寺 旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報Ⅰ』 2013。
5）前掲註４。
6）前掲註２。
7）前掲註２。
8）前掲註２。
9）川越俊一「大和地方の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』1983。
10）前掲註４。
11）前掲註４。
12）山崎信二「平城宮・京の文字瓦からみた瓦生産」『文化財論叢Ⅲ』2002。
13）奈良県教育委員会・建築研究会『唐招提寺防災工事・発掘調査報告』唐招提寺、1995。
14）奈良県教育委員会・奈文研『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺、1990。
15）『平城報告ⅩⅦ』2011。
16）『平城報告XIV』1993。
17）奈文研『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』2007。
18）前掲17。
19）奈文研『興福寺食堂発掘調査報告』1959。